

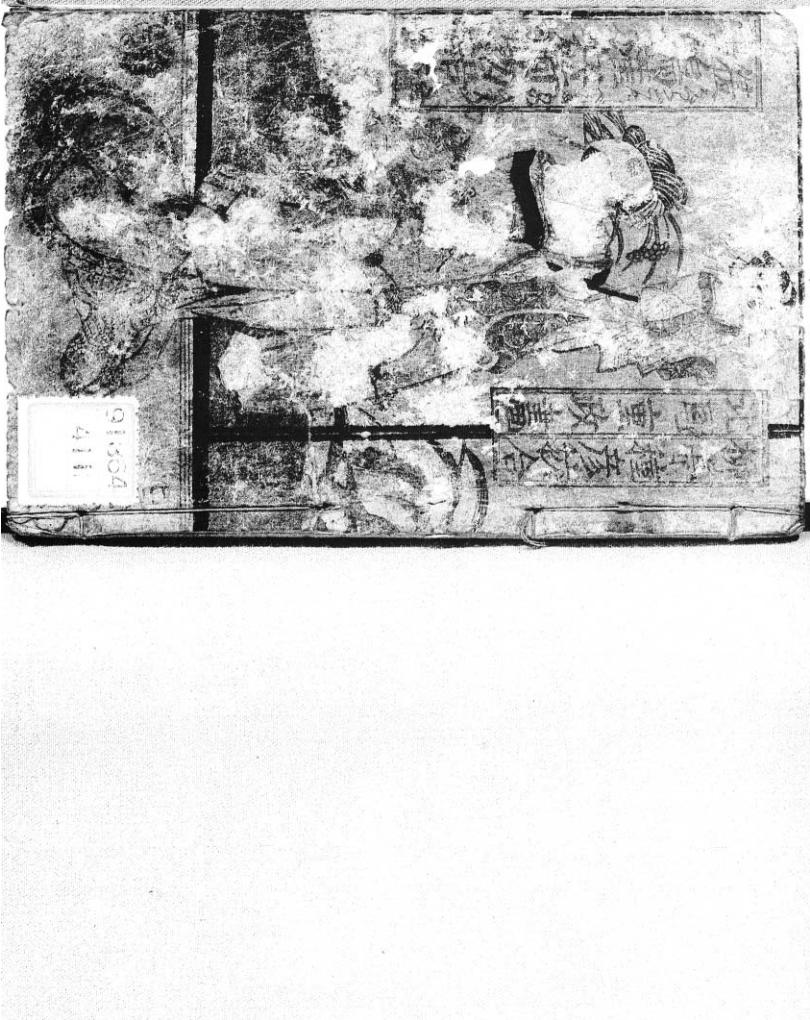
翻刻・林屋正蔵作『復鶉権兵衛物語』

小島文子

凡例

- 一、底本は天理図書館蔵（請求記号 913.64 1-411）。なお、狩野文庫本（マイクロフィルムによる）も併せて参考にした。
  - 二、イ 原文はほとんどひらがなで書かれているが、読みやすくするため適宜漢字に改めた。
  - ロ 漢字は、旧字体を新字体に改めた。
  - ハ 仮名づかいは底本どおりとした。
  - ニ 原文にある漢字とふりがなはそのまま残した。
  - ホ 原本にも獨点は施されているが、さらに補った。
  - ヘ 元々原本に付されていたものと区別はしていない。
  - ヘ 原本には句読点がほとんどないが、句読点・中黒を加え、また適宜改行した。
  - ト 人物の詞には鍵括弧をつけた。
- 三、巻末の広告は、紙面の都合上、割愛した。

表紙





落語之草子 序  
落語之草子 序 落語之草子 序  
 日本之猿蟹合戦鬼の持子室の子撫を佛説に出  
 本之の盪場入天竺之佛在世百喻經を初め生之三行  
 の長老の物語のな之此道 普く名をとりて御藏之る

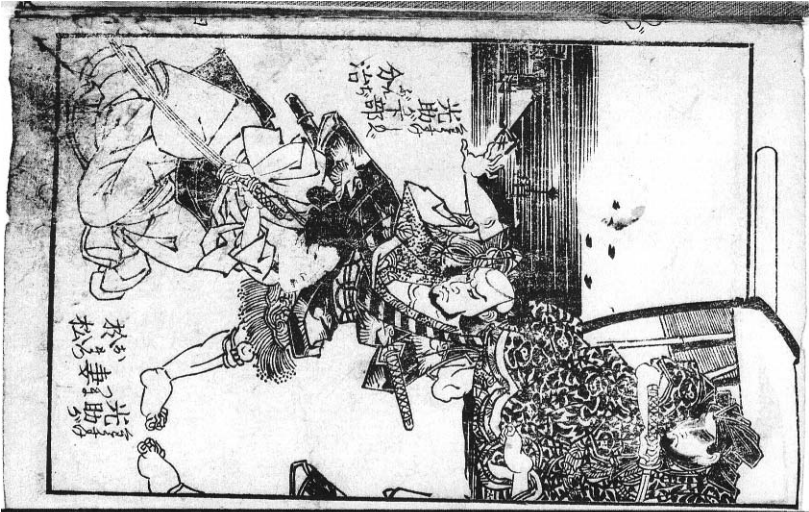
柳亭種彦誌  
 作者 林屋正藏  
 續物語 鵠權兵衛

復鵠權兵衛續物語  
 柳亭種彦校答  
 北尾重政畫  
 林屋正藏作  
 文政己丑春新鑄 永壽堂梓

表紙・見返し







五十一才



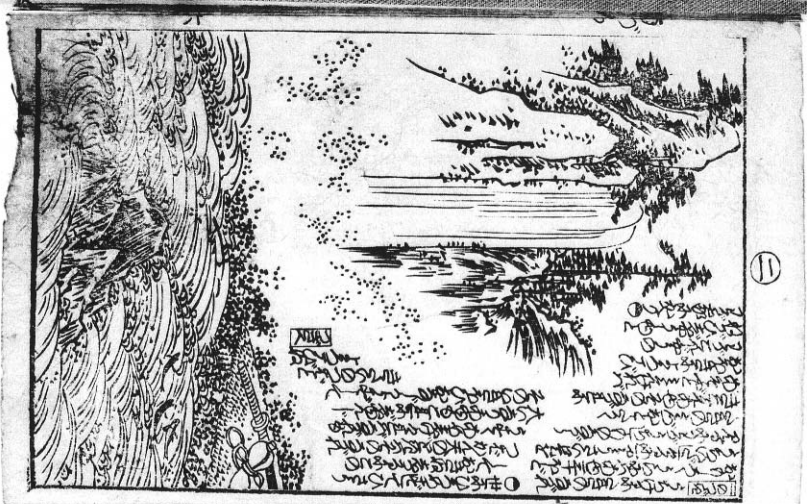
五輪の雲

四十七



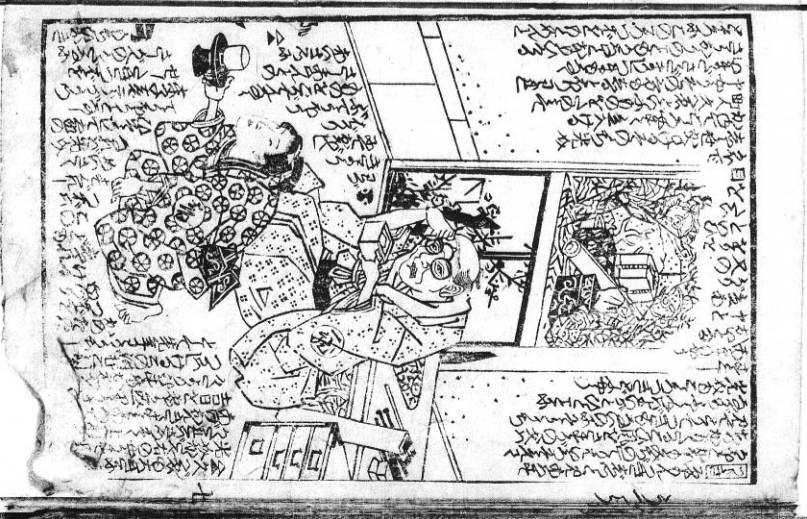
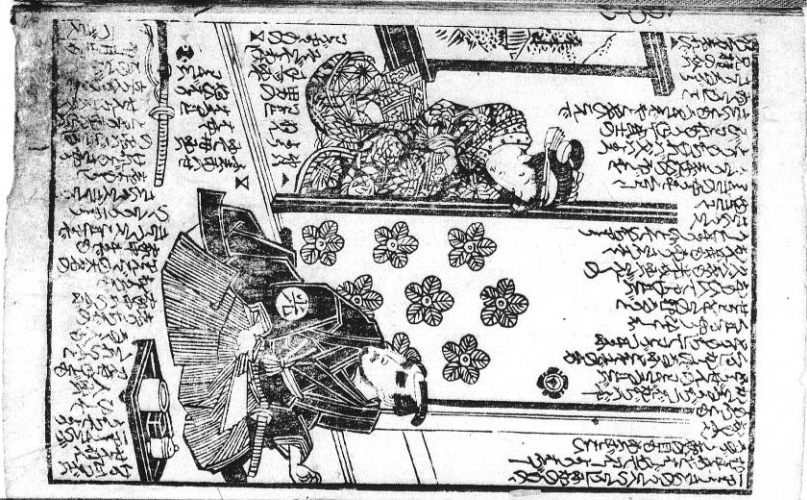
水天宮御守

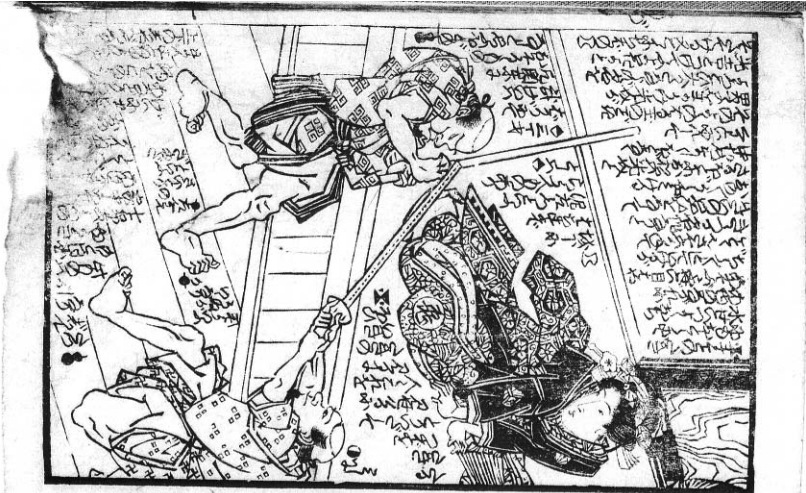
鑓屋重藤  
權之助

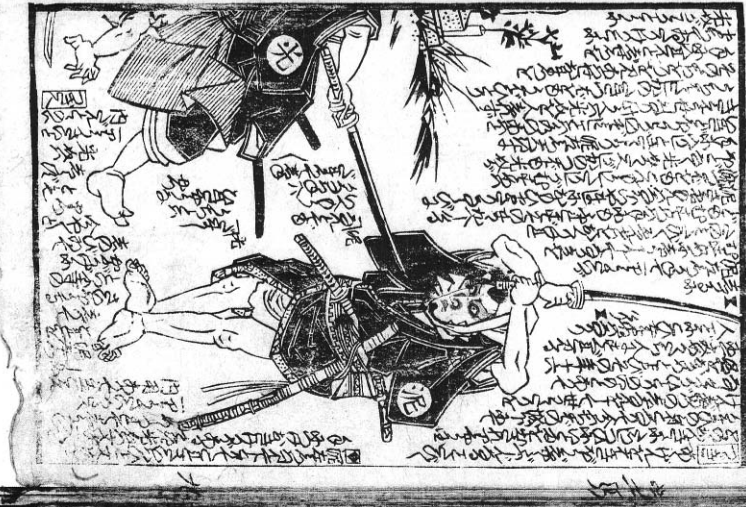




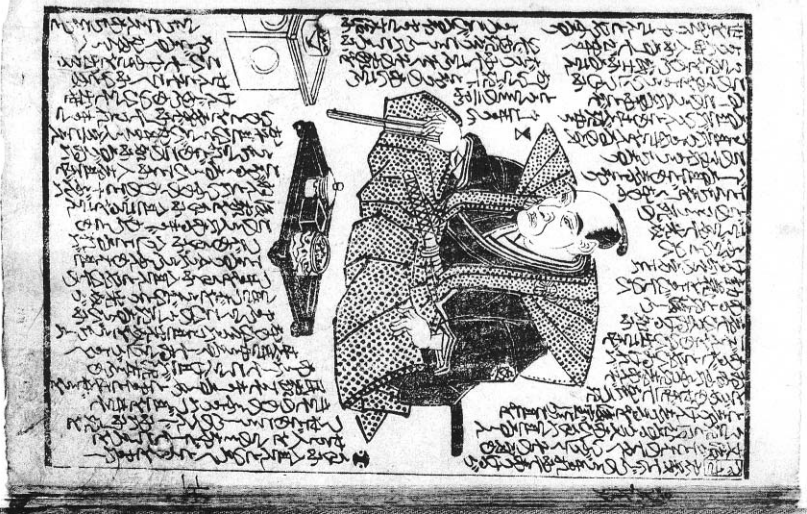


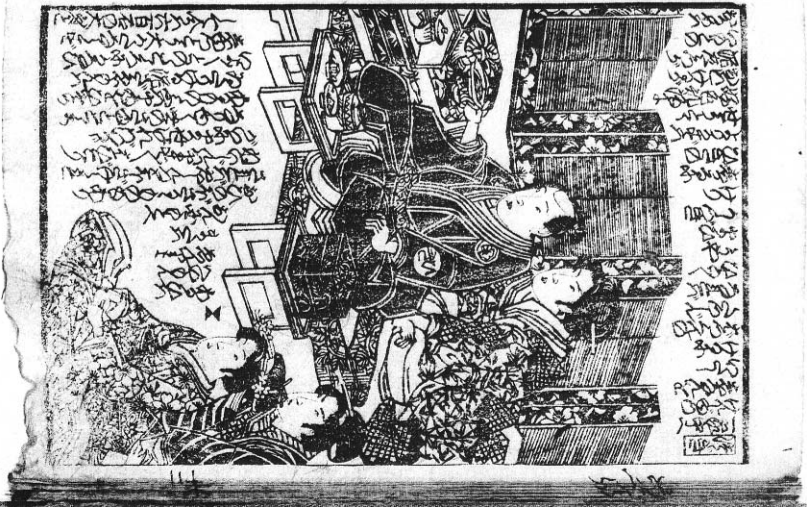


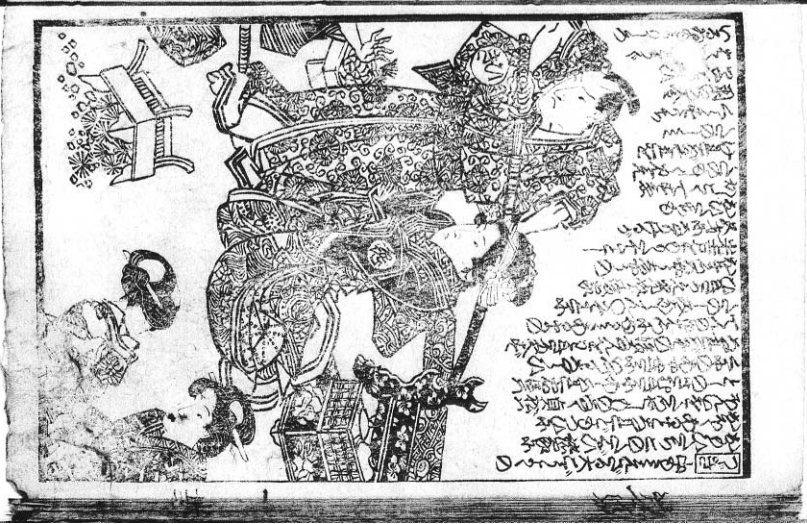
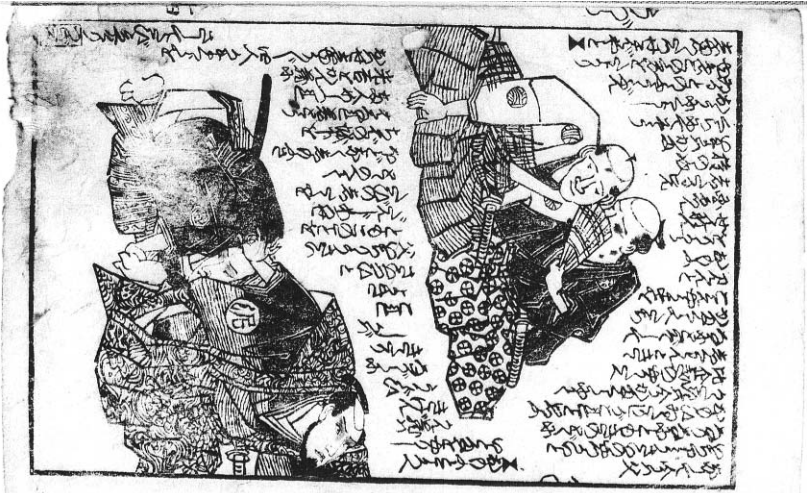




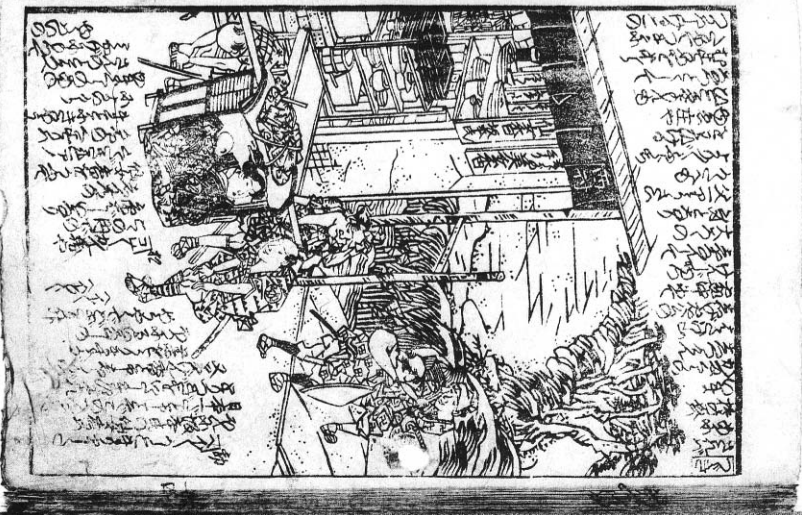
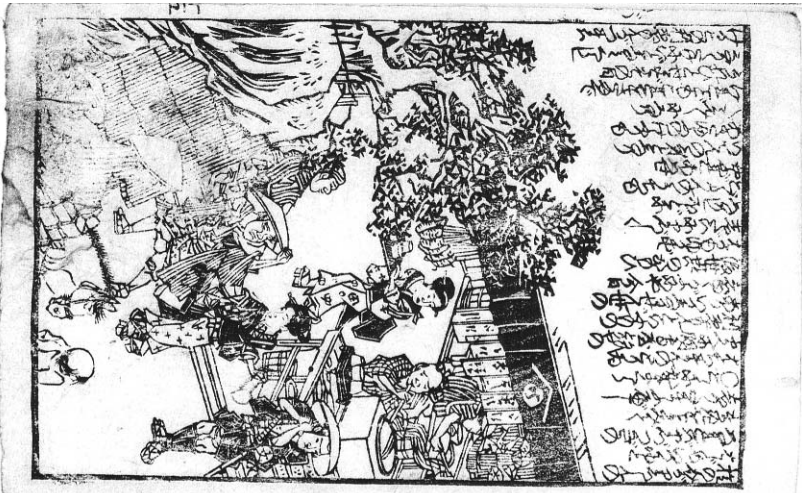






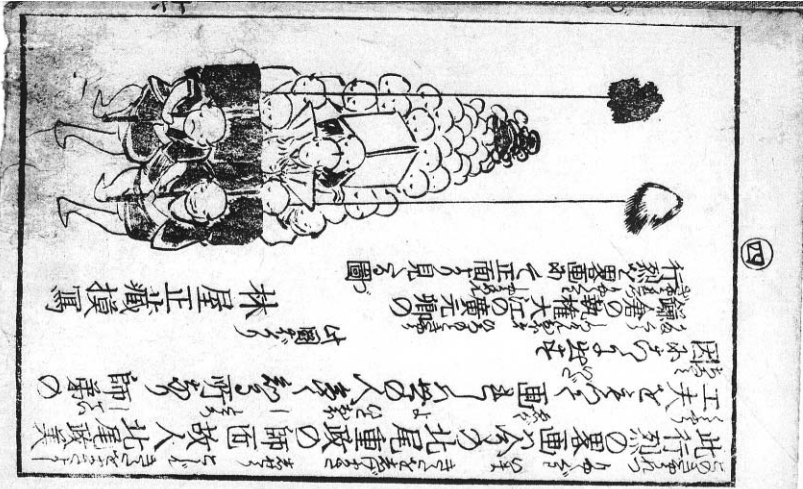




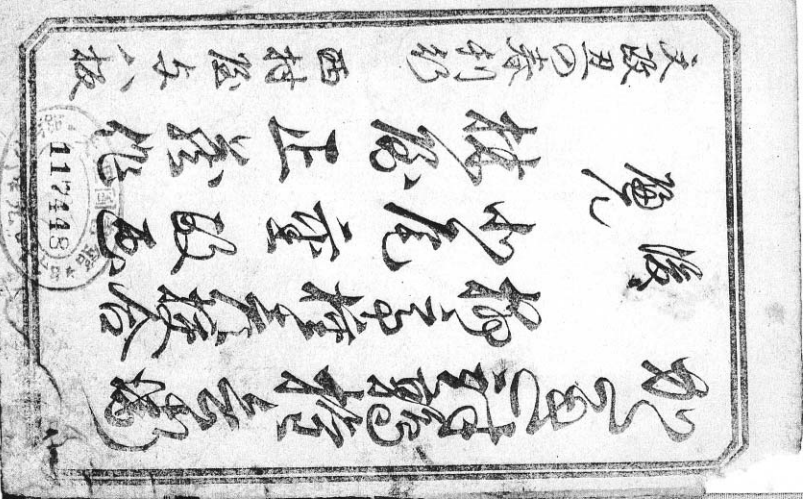




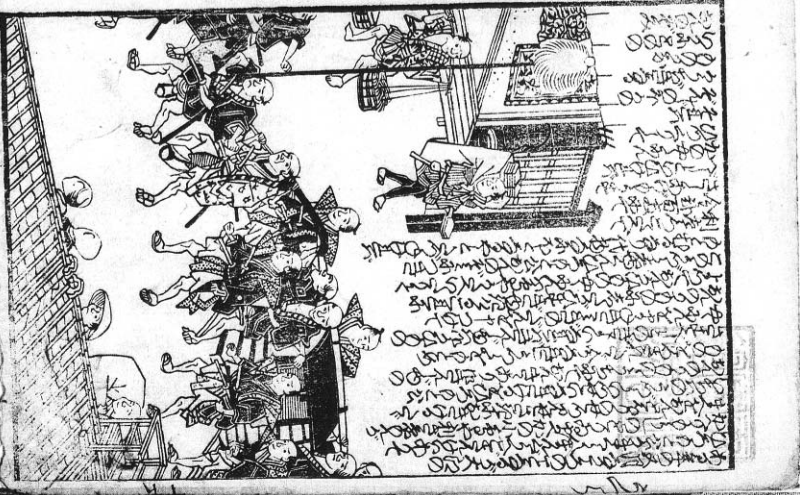
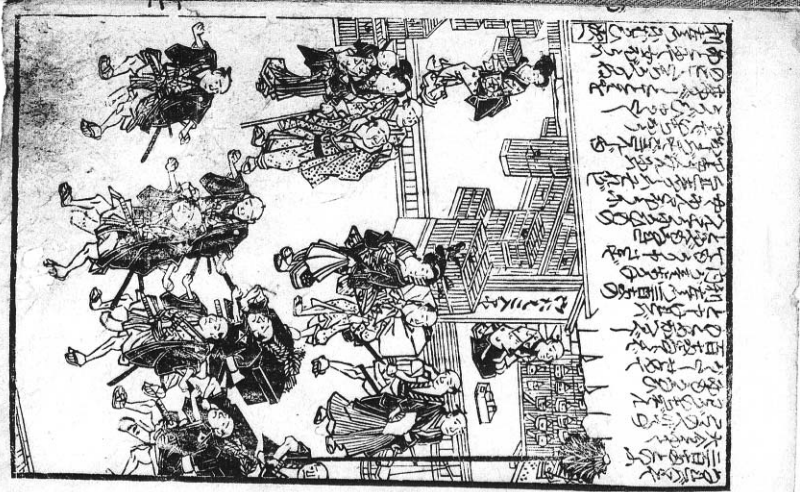




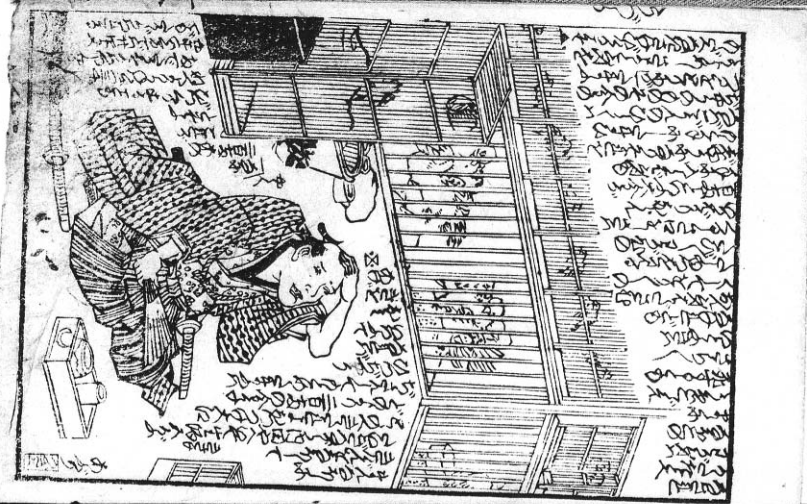
此行列の畷画の北尾重政の御面故人北尾政美  
 王夫之と云ふ畷画の終入多し知り所勿師兼の  
 因体ありて此女  
 繪畫の執権大江の黄元卿の  
 行烈畷畷画の正南より見之圖  
 林屋正藏撰寫  
 付圖あり



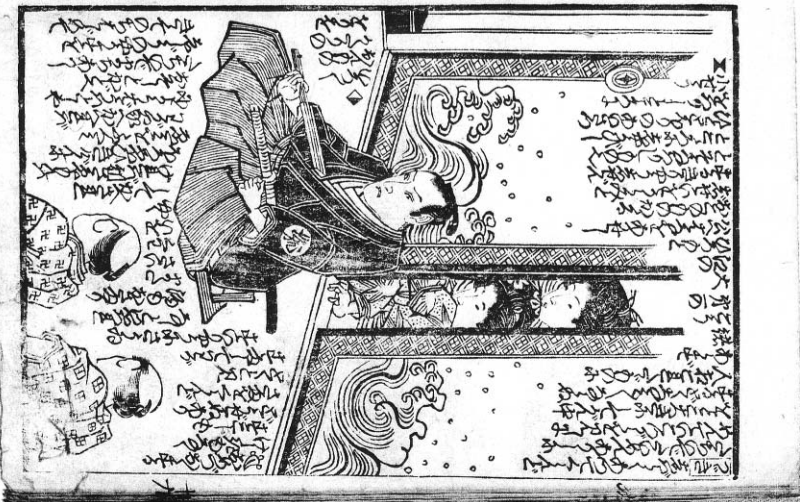
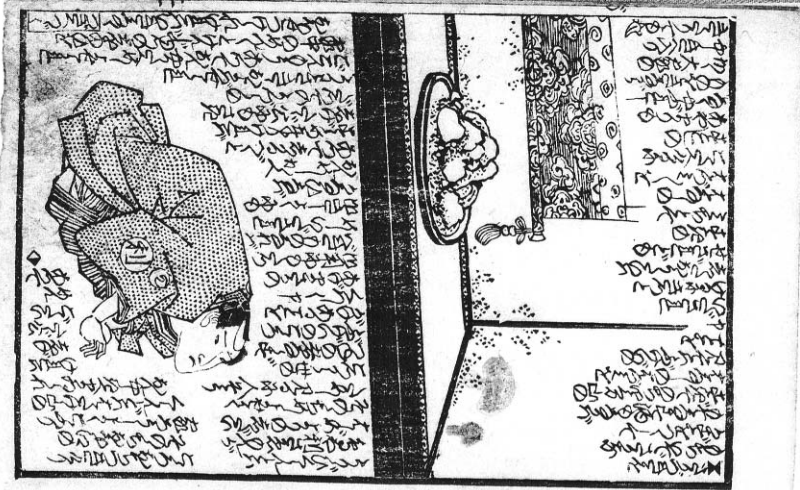
十廿十



十廿十



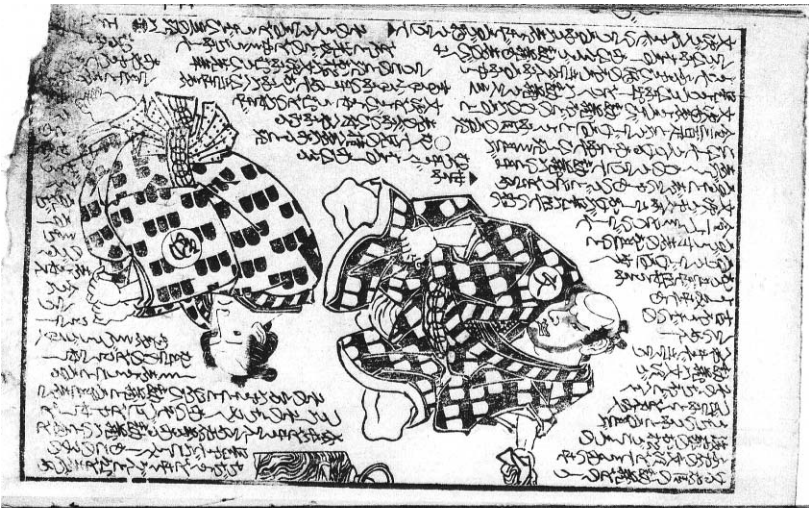




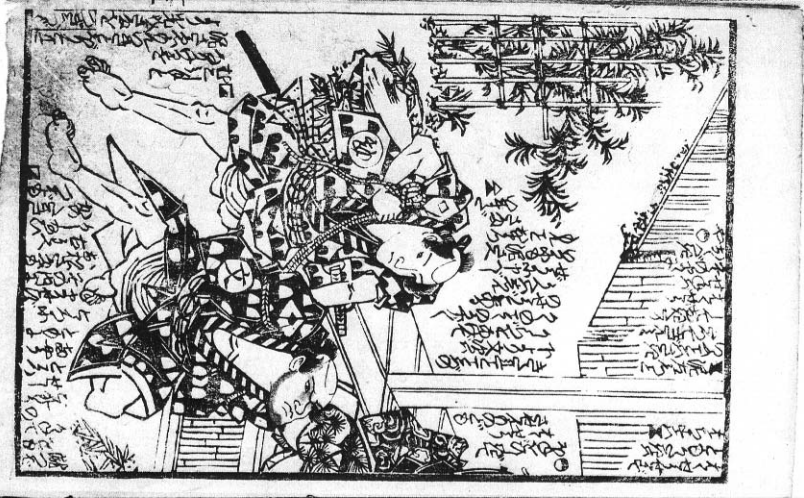




4-11-11

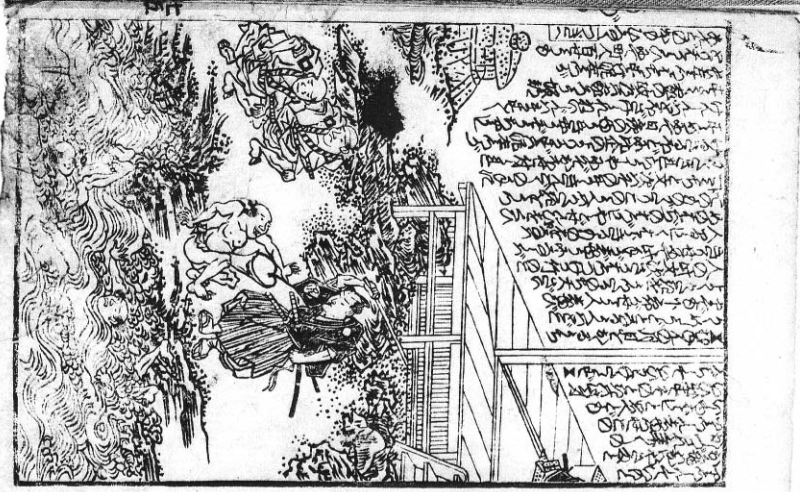


3-11-11





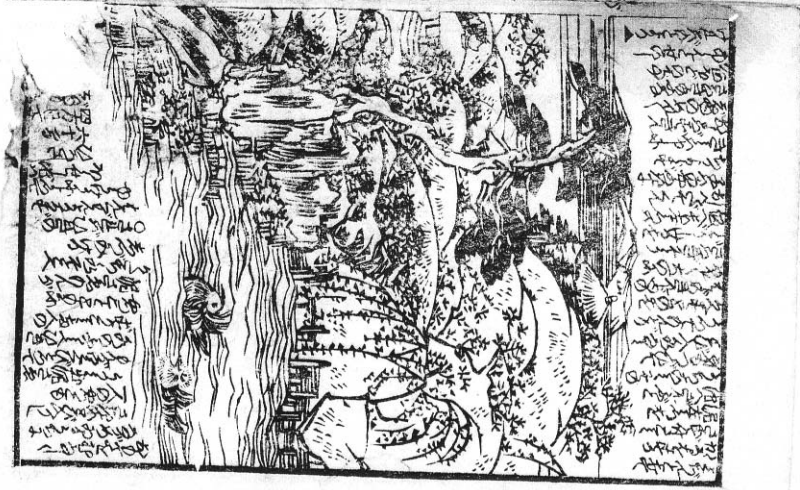
十一十五



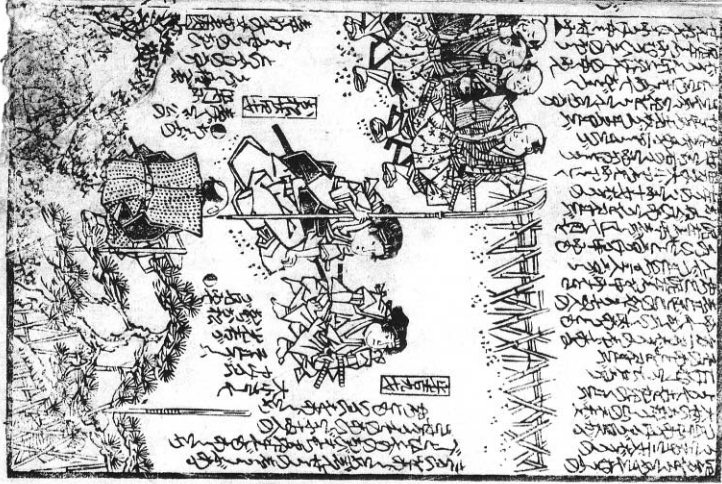
十一十四



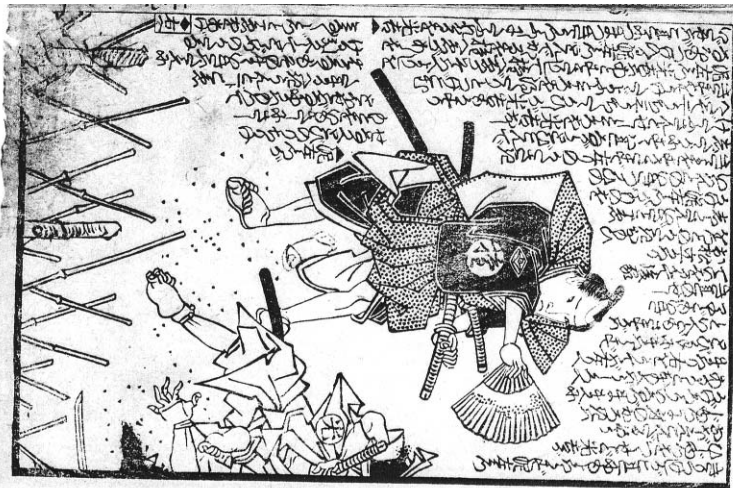
十一十一



十一十一









江戸  
北尾重政画  
林屋正藏作

第一番  
第二番  
第三番  
第四番  
第五番  
第六番  
第七番  
第八番  
第九番  
第十番  
第十一番  
第十二番  
第十三番  
第十四番  
第十五番  
第十六番  
第十七番  
第十八番  
第十九番  
第二十番  
第二十一番  
第二十二番  
第二十三番  
第二十四番  
第二十五番  
第二十六番  
第二十七番  
第二十八番  
第二十九番  
第三十番  
第三十一番  
第三十二番  
第三十三番  
第三十四番  
第三十五番  
第三十六番  
第三十七番  
第三十八番  
第三十九番  
第四十番  
第四十一番  
第四十二番  
第四十三番  
第四十四番  
第四十五番  
第四十六番  
第四十七番  
第四十八番  
第四十九番  
第五十番  
第五十一番  
第五十二番  
第五十三番  
第五十四番  
第五十五番  
第五十六番  
第五十七番  
第五十八番  
第五十九番  
第六十番  
第六十一番  
第六十二番  
第六十三番  
第六十四番  
第六十五番  
第六十六番  
第六十七番  
第六十八番  
第六十九番  
第七十番  
第七十一番  
第七十二番  
第七十三番  
第七十四番  
第七十五番  
第七十六番  
第七十七番  
第七十八番  
第七十九番  
第八十番  
第八十一番  
第八十二番  
第八十三番  
第八十四番  
第八十五番  
第八十六番  
第八十七番  
第八十八番  
第八十九番  
第九十番  
第九十一番  
第九十二番  
第九十三番  
第九十四番  
第九十五番  
第九十六番  
第九十七番  
第九十八番  
第九十九番  
第一百番

江戸  
北尾重政画  
林屋正藏作

三十一

表紙

柳亭種彦校合

北尾重政画

復鶉権兵衛物語 全六冊

前 丑春新版 西村屋版

表紙見返し

復鶉権兵衛物語

前編 柳亭種彦校合

北尾重政画 林屋正蔵作 文政己丑春新鑄 永寿堂梓

一丁オ・一丁ウ

續物語

鶉権兵衛

作者 林屋正蔵

序

柳亭種彦誌

おとし話と草ざうしは譬は浪と水の如く 只動くも動かざるの違なり抑はなしの濫觴は天然にては佛在世百喻經をぞ初めとすべきされば日本の猿蟹合戦鬼の持たる宝の子植おほくは佛説より出たりと、ある長老の物語りぬ。さて此道に普く名をとりたるは御蔵ぐるみに(一丁オ)紙袋呂呂利と納る鞘細工その鯉口の軽口は二百年のむかしくあつた土佐節外記節時代加羅といひしも今の世には薫をき、知る者もなし鹿の巻筆操かへす露がはなしも消て百年近曾豊後や新内とともに流行る頓作者の多くの中でござんんの落し噺や口あひや、化物噺の大仕掛高座でともす焼酎火あかるく元祖と世に知られし正蔵が暇々に書きあつめたる復讐奇談は彼うごかざる水にしてやつはりこつちの畑の潤ひ花を咲せし詞の林屋高座で動けば人の浪うつと

いふのも興行の隠語に縁あり最負あり両道かけて欲にふける鶉権兵衛とは号しなるべし。

文政十二年己丑孟春(一丁ウ)

一丁オ

まじめな口上

当年も相かはらず又々有がたく御目見を仕ります。私事 先年より持まへの落はなしの外に怪譚又は復讐ものを著述仕候処、別て当年は御馴染の柳亭先生へ校合ならびに序文を相頼み、やうやく発市の時を得て出版仕候間、売出しの当日より御求御高覧のほど偏に奉希上候。

西両国の定席にて、正月二日より年中戯作物かたり、ばけ物はなし披露仕候。御通行の節、御立寄御休息ながら御来駕可被下候。 林屋正蔵伏稟

口絵・二丁ウ、三丁オ

妻を乞て、鶉のよめる。とへかしな 浅茅か原に妻とめて 我古里の 秋はいかにと

鶉権兵衛が妻 八重  
秩父重忠近臣 鶉権兵衛利勝  
鶉のせい 元の原へはなちかへして後

頼みぬる 人の情の深ければ  
浅茅か原に契りこめつつ

口絵・三丁ウ、四丁オ

比企の老職 蓮葉泥左衛門

千葉の藩中、星月光助

が下部 寒蔵

光助一子 光吉

光助が妻 於松

光助が下部 分治

口絵・四丁ウ、五丁オ

水天宮御守

鏢鍛冶一龍齋が一子 権之助

泥左衛門妹 阿亀

五丁ウ、六丁オ

人皇八十二代後鳥羽の院の御宇、文治

元年平家ことごとく滅びて後、建久元年十一月、頼朝公を

征夷大將軍に任じ、天下の政この時初めて武家に移る。

太刀ちは鞘、弓は袋に納まりて、戸鎖さぬ御代と万民は皆

万歳をうたふ時、国々の大小名御暇を給はりて領地くへ

帰りける。ここに下総の国の城主千葉介常胤の領分に一龍

齋いぢりうといふ鏢鍛冶あり。先祖は名高き鍛冶にて、打ち出す処の鏢、各々模様地鉄を以つてその好むところを打ち出すに、意匠を飾らず枝葉を加へずしてその勢ひ写り、顔貌かほかたち手足装束に至るまで自然と具はり、音に聞こえし名作なり。よりに今に至りても大名、高家の御手にも偶さかならでは御所持なきほどの物なり。子孫相續してその技を継ぐといへども、先祖には及ばずして並々なれば重宝とせず。然るに、今の一龍齋といふは、幼年よりその技に心を掛け、神に祈り、なにとぞ先祖の高名を我また顕さんと思ふより外無きゆゑかたましく打ち出す中には先祖の打ちしに似よりけれども、心に適はず、ある時その職の諸道具を持ち、山の麓へ至りしに、片辺かたはらなれば行き来もなく、物静かにして清き流れあり。伝ひ行きて見れば、一つの滝ありて谷川へ流れけるに鮎あゆの魚数多滝壺へ上り来る。折から夏のことなればいと涼しく「人家じんかを離れ山林にかくる、は聖賢の道、長生不死の良住りやうぢゆうならん」と甚だ興じ、この滝の風景を打ちて見んと道具を出だし、身を清め、心に念じ二の巻へ（五丁ウ）一のつづき打ちけるに、滝の流れおもしろく、裏には鮎三十ほど打ち出しけるに、一龍齋是を見るに、我が打ちし物ながら滝の水音高く聞こえ鮎そ

の流れに遊ぶと見えれば大きに喜び、「我今生の願ひ成就」と我が家に帰り世に広めずして秘蔵しておきぬ。然るにこの鏝、干天の時はその流れ薄く、雨繁ければ流れも大いなり。鮎もこれに準じその勢ひ同じからずして、稀代の鏝と喜びぬ。

つぎへ

六丁ウ、七丁オ

つづき

り。総領は権之介と言ふてその年二十一才、力量優れ才知ありて男振りも醜くからず。同じ町の名主彦右衛門の娘八重と言ひ交はし、忍び寝の枕重なりて、今は人の口の端にかゝる憂き身も心からと、互ひに手に手を取り交はし、何処をあてと行く先は、心細道畦伝ひ、若氣とは言ひながら、つひに欠け落ちして、行き方知らずなりにける。一龍齋が心労言ふばかりなく、毎日彦右衛門方の詫びことに近所の人々仲に入り、色々と言ひこしらへ、まづ行方知れ次第元々へ帰さんと、彦右衛門の心をなだめける。又、権之介の妹にお松といふて、年もいざよふ月花も及ばぬ姿、糸柳桜の媚びに梅の香を含ませたる装ひに、見る人ごとに恋わびて、狭布の細布胸焦がし、立るばかりに錦木の朽つるを恨むばかりなり。ここに又、千葉の家中に星月光介とい

ふ人あり。不幸にして父母に早く離れ、未だ定まる妻もなく、今年二十三才になりけるが、生得優に優しく骨柄も人にすぐれ、忠義を専らと勤めける。ある時、鏝を求めんと思ひ、一龍齋が方へいたり、「鏝を見せよ」といひしかば、一龍齋申すやう、「これまで様々打ち出だしけれども心に適ひ申さずして、ことごとく打ちつぶし、出来合ひ候鏝ござなく候。ここに一つ御相談のことあり。私、先年、他処へ出でて打ち候瀧鏝とまうすは、元祖の打ちしに似よう候と覚えしが、その道とて末の子の音二郎と申すもの、十二才の時これを手本にいたし、その模様を写しまうせしが、実に左右の手のごとくよくも似たり。この鏝一枚有り合わせ候へば、御目かけ申さん。」とて取り出して見せければ、光介これを見て、「さてくおもしろき気色かな。いかにもこの鏝、我に得さすべし」と所望し、代金はいかほどにやと尋ねしに、一龍齋申すやう（六丁ウ）「倅が心ゆかしなれば、少々御置きなさるべし。」と答へしかば、光介は懐中より金子をとり出しその値を渡しける。折節、娘、茶を持ちて出しが、何思ひけん、弟に渡して片陰に隠れて光介が顔をうち見やり、初めてかかる優男、山家に稀な

つぎへ

追手「おいらが役はいつでも当り前。六

尺棒に弓張提灯。知恵のねへやつだ。作者がうらみだ。そして此人物で、ついで尋ね出したことがねへ。」(同)「あの野郎も憎いが、娘も憎い。俺とたいがい出来てゐたのだ。半分は出来た。娘は不得心だが俺が方ばかり半分だ。」(同)「遠く逃げたと思はせてやつはり近所にゐるのだ。道中へはなかく出ねへ。その証拠は鍔鍛冶の娘だ。昔からいふとほり、鍔鍛冶道中がなるものか。」(同)「これが湯屋の三介と逃げたなら呼びやうがある。ソレひたきに娘、お宿はどこだ。チウくくくかもか、いまくしい。」

七丁ウ、八丁オ

つづき

衣紋付き、じつと見合す顔と

顔、紅葉の照葉色添えて散りかゝりたる恋風をさすのが父は見取りて、月も無いのに空うち眺め、降らねば良いかと一言に、光介も心付き、「どふやらすこし雨模様お暇申す」と立上がり、又の折をと言ひたいを目顔で知らせ帰らせる。その後、光介かねて心安く立入ける町人久兵衛と言ふ者を頼みて申やう、「その方も知る通り、我未だ定まりし妻も無く、相応のこともがなと思ひけるところに、この頃、鍔を求めんと一龍齋の方へ至りしに、彼の者の娘を初

めて見しより、恥づかしながら夜の目も合はず恋思ふ也。尤も刀鍛冶、鍔鍛冶は武士同然の技なれば苦しからず。何卒その方取り持ちして我妻にくれるやう一入世話ひしほを頼むなり」と思ひ入て申ければ、久兵衛も光介には段々の恩義もあり、早速「畏まり候」とて一龍齋方へ行きて、右の様子詳しく語り、首尾のほどを取り持ちければ、父は喜び、「我も予て武士の妻ともなさばやと思ひ込んで至りしこと、さり乍ら兄権之介は行方知れず▲弟は幼年、我男の手一ツにて育てあげし我まま者、不仕合にて母には早く離れ、縫ひ針わざは我が器用にて覚へしばかり。不調法者を御合点なら差し上げんとの挨拶に、久兵衛も大きに喜び、光介方へ右の様子もの語れば、早速上へ願ひ上げ、御聞き済みあつて吉日を選び、一龍齋方より娘お松を遣はしける。この時、婿引手として、先年我が打ちしかの瀧鍔を譲りける。しかれども、この鍔は優れし名作なれば、光介秘蔵して家の重宝となし、末子音二郎が写せし瀧鍔を差し代への刀に用ひおきける。此鍔は先年一龍齋が打ちてより秘して人には見せねども、誰言ふとなく、人も知り、千葉の家中は言ふに及ばず、隣国の大名の家中までも聞き伝へ、これまで幾人か一龍齋方へ来たり所望しけれども、左様の

品はござなしと取り合はねば、詮方なく立ち帰りけるに、この度、星月光介 つぎへ

八丁ウ、九丁オ

つぎき 一龍齋が娘を娶り、婿引手として彼の鏢も光介が▲手に入しと聞くより家中の面々我も

〜と見物を望みしに光介は逸らさぬ風情にて、末子が打ちたる瀧鏢を取り出して見せけるに、人々これを見るに、瀧の勢ひ誠の瀧にも劣らず水勢強く落ち、鮎の流れに遊ぶ風情、目早ちら〜として生けるが如く也。さてはかねて聞きつる名作なりと奇異の思ひをなして、各々羨みける。さるほどにお松は光介と仲睦ましく、ほどなく懐妊して、その翌の春、玉のごとき男子をまうけ、光介が喜び大方ならず。名を光吉と付け、蝶よ花よと育てける。又ここに千葉の城下に蓮葉泥左衛門といふ浪人者あり。年は三十才ばかりにて武芸は凡関東に恐るる者なしと思ふほどの達人なりしが、此者は元、同国結城七郎友充の家中にてありしが、生得、強欲奸佞にて、己が芸に慢じ、人を侮り、常に酒を好み、満酔の上にては上下の差別なく 次へ (弟子)「大和人形を見るやうな様をして、それどうだ。」(同)「さういふ己が良い形か。左官の才取りといふ様だ。」

九丁ウ、十丁オ

つぎき

悪言を吐き、傍若無人なること度々、殿の御聞きに達し、つひに暇を出され、領国構ひの身となりて今は千葉の城下にて剣術の指南をして世渡りをなしけるが、一人の妹ありて、名をお亀と呼び、その年十六にて見目容貌人に優れ、見る人ごとに恋ひ止まぬはなかりけり。然るに、泥左衛門かねて一龍齋が娘に執心して、仲立ちを頼み、度々艶書を送りけれども、娘は手にも触れず、そのま、返しける。泥左衛門は、なほいや増しに想ひ増さり、ならびに瀧鏢をも懇望したりしが、娘はほどなく光介方へ嫁し、彼の鏢も光介が手に入りしと聞くより、泥左衛門大きに憤り、我が望みしことは水の泡と消え失せしなり。此上は光介を人知れず打ち果たし、かの瀧鏢をも奪ひ取り、その後、折りを見合はせ、お松を手に入れんと、時節を待ちてあたりけり。ここに光介が若党に文次といふ者あり。かねて泥左衛門と心安く出入しけるは、泥左衛門の妹お亀に執心ゆゑ、折りを見合はせ言ひ出さんと思ふ下心を泥左衛門は見取って、これ幸ひと文次を手付け置きけるが、ある時、光介は文次一人を召し連れて、舅一龍齋方へ内用ありて立ち越えしに、泥左衛門これを知りて西方寺といふ寺の藪陰に忍びみて今や〜と待つとも



知らず、光介は一龍齋と内談と、のひつぎへ（泥左衛門）  
「何とでも言へ。もうかなはねへは、黙って死ね〜。」  
（光介）「騙し討ちとは、卑怯な奴。」（文治）「得心づくで  
主人を殺させるも、お亀を手に入れたいばかりだ。こうお  
亀に気を揉むこともねへ、大神楽の神主ちやアあるめへ  
し。」

十丁ウ、十一丁オ

つづき

もてなし酒のほろ機嫌にて

何心なく敷陰を通りける。待ち設けたる泥左衛門飛び掛か  
つて左の肩先したたかに斬り付けたり。これはと光介抜き  
合せ、二打ち三打ち斬り合ひしが、始めの深手に、はたら  
きえず漂ふ処を又一ト太刀斬り付けられ、そのまま息は絶  
え果てける。泥左衛門も左の腕首斬りつけられしが浅手な  
れば事ともせず、かの瀧鍔の刀を奪ひ、文治にむかひ何や  
ら囁き飛ぶがごとくに帰りける。かくて文治は屋敷へ帰り  
大息付きて「私、旦那のお供いたし罷り帰りしが、ご失念  
の事あつて、汝はこれより舅の方へ引き返し、然々の旨申  
すべしとのことゆゑ、引き返して参らんと三丁ほどゆきけ  
る処に、旦那光介様討たれ給ひし由、誰やらん告げ知らせ  
し者ござ候ゆゑ、取つて返し、当の敵を取らんと思ふ甲斐

もなく、はや相手はその場にゐず、二打ち三打ち斬り結び  
しが、足早に逃げ去りしかば、無念ながら帰り候と言葉の  
転々、うろたへ眼をこすり〜て申しけるにぞ、妻のお松  
は大きに驚き、あまりのことに涙も出でず、呆然としてゐ  
たりしが、生得発明なる女なれば、悲しき中にも分別定  
め、「かかる仕儀になりしは是非も無し」と、まづ父の方  
へ知らせければ、さつそく駆け来り大いに驚きけるが、一  
間へ入て何かひそ〜お松と囁き、その後、目付方へ届け  
ければ、さつそく検使の役人目付中立合ひにて死骸を検め  
し処、いづれ意趣打ちに相違なしと評義一決して、死骸片  
付けの義を三のまきへ二のつづき申し渡されければ、  
お松は泣く〜菩提所へ葬りける。ほどなく父一龍齋と相  
談して、忘れ形見の子もあることなれば、せめては六ツ七  
ツまでも養育して敵を討つて夫の亡霊に手向けさせ、その  
妄執を晴らさせ、再び家名を興さんことこそ肝要なりと訴  
へ、文をもて御暇を願ひければ、御上にも甚だ憐れみ給  
ひて、「一子あれども幼稚なれば、たとへ敵は知れたりと  
て討つことは成り難からん。不憫ながら大法なれば是非な  
く、願ひに任せん」と、忝くも御落涙に及ばせられ、当分  
養育代として金子一ト包み下されければ、お松は、有り難

涙にくれながら、早速町家を借り受けて、若党もろとも屋敷を引き取りけるこそいたはしき。○さて若党二人ありける中、勘藏といふ者は譜代にて、しかも力量人に優れ、剣術も達し次へ文(治)「旦那様は、たつた今、さいほう寺の敷が斬つて掛りまして、石塔が旦那で敵が逃げまして卒塔婆が倒れました。」下女「おや、旦那が殺されたとか。そんなら、米は、それだけ少なくなしかけやう。しかし、多くても、私が二人前食べるから良いが。」

十一丁ウ、十二丁オ

つづき

忠義貞実の生まれにてあ

りけるが、文治が言葉の転々訝しく、「その身も敵と同心なるか、又相手は誰ならんと知りけん、しかるを後室こうしうこれに咎めもせずして、落ち着き給ふは、深き思案ぞあるべし」と思ひぬければ、一存をも言ひ出さずして控へおける処に、ある時後室、勘藏を呼びていひけるは、「その方ことは譜代と言ひ、定めて光介殿横死のこと口惜しく思ふべし。なれども、知るとほりこの子は幼稚なり。我はか弱き女の身なれば、如何ともすべき用なし。この上は何卒この子を養育し、常に敵を持つ武士になさんよりは、町人になして心安く世を送り申さんと思ふなり。さるによつ

て、その方達も、これと言ふ用事もなければ、気の毒ながら暇を遣はすなり。しかし今までに変わらず、折々心安く来りてこの子の顔も見えてくれられよ。心に変ることは無し」と懇ろに言ひて、「これは光介殿の形見なり」と、刀一腰、他に金子一ト包み指し添え出だしければ勘藏は大きに悲しみ、身も浮くやうに泣きけるが、後室の貞実発明なること抜群なれば、「これまた仔細こそあらん。又は生得職人の娘なれば、敵を尋ね出し本意を達し、主人の家を再び興さんと思ふ志はあらざるか。然れども男勝りの子ての氣質なれば、とかくより有無を窺ひ見て実々不甲斐無き心底ならば、和子七八才までを見合はせ、我後見して敵を討たせ、主人の家名を興さん」と分別して、何の応いさへもなく、仰せ畏まり候と、形見の二品押し頂き、一ト通りの挨拶ばかりにて、早速その家を出て行きけり。後室は心に喜び、なほ又文治に向かひ、「その方ことは光介殿予て慈愛したまひ、妾わらわも又心置きなく思ふなれば、この子今少し成人するまでは、これまでの通り奉公を致しけれよ。運に叶い時節到来して又世に出まじきものにもあらず。その節はその方の旧功を忘れずして、ともかくも世に在らせんと思ふなり」と、頼もしくこそ言はれければ、文次は喜び、

「こは忝き御仰せ、随分出精いたし御奉公仕らん」と申しければ、後室も嬉しげに会釈してゐられしは、深き所存と見えにける。○光陰は矢の如く光介討たれて二年ふたねのその間、蓮葉泥左衛門は後室お松を手に入れんと色々手と手を回し、世話人を頼みなどして心を尽くせども、後室の返事には「錦を着ての武士ものぶよりは、綴れを着て民家こそ増しならめ」と、誠素性を顕はして答へければ、泥左衛門もすべきやうなくしてあたりしが、よくよく思ひけるは、「我光介を討ちしは、全く恋の敵並びに瀧鏑を奪ひ取り、光介が妻を手に入れんと思ひてのことなり。今は鬱憤も晴れ、鏑も手に入りしことなれば、この上はあるまじ。尤も、後家を手に入れざるを残念とは言ふものの、物事十分はこぼるる習ひ、殊に人知れず討ちたれども、この処に長居は恐れ、一度鎌倉へ立こえ妹を餌ばにして、我又劍術も言い立て出世せんと、そこく暇請ひして、下総を出ける。ほどなく鎌倉へ立ち越え、あちこちと近づきを求め、雪の下辺に借屋してゐたりけるが、推拏の者あつて比企の判官頼員が館へ召され、劍術を言ひ立て、家中の面々と試合せし処に、天晴れの達人とあつて、早速二百石を以つて抱へられ

つぎへ

十二丁ウ、十三丁オ つづき 一家中へ劍術指南をいたしけるに、抜群の達人なれば人々敬ひ傳きけり。然るに比企頼員は生得好色乱酒におはしけるが、泥左衛門が妹のお龜は世に優れし美人なりと聞き及ばれ、側仕へに差し出だし候様仰せ付けられければ、泥左衛門は時節到来と大きに喜び、吉日を選みて差し出だしける処、世に優れし美女ぢびよなれば、元より色好みの頼員なれば、これより昼夜遊興に耽り、行跡以ての外なりければ、忠義の面々寄り／＼御諫言申上るといへども御用ひなく、強く諫め申せば永の暇を出されあるひは閉門遠慮、又は御国元へ追ひ上ざる、ものもあり。されば、忠臣は遠ざけられ佞人は益々蔓延り、我意に任せければ如何なりゆく世の様と心ある武士ものぶは、眉をひそめたりける。泥左衛門は、いよく殿の心に適ひ出頭大方ならずして、今は六百石の本身となり、日夜御側を離れず媚へつらひ、諸事己がおのままに計らひ、尚心中に思ひけるは、「この上運に叶ひ妹が腹に男子出生あらば、我が殿を如何にも計らひ、その子を御家督に立て六十万石の政道を掌に握らん」と つぎへ

十三丁ウ、十四丁オ

つづき

山も見えざる大強欲の思



夫婦となり始めのほどは相應に暮らしけるが、今斯く落ちぶれて、破れ単物を着て今日をやう／＼暮らす中にも、夫を敬ひ大切になして、仮にも悪言口答へ等することなく身を慎み傳きて、夫を恨み世を恨むる気色もなく、夫婦睦しく暮らしける。

正藏作・花押

重政画・花押

書林并二地本問屋  
江戸馬喰町二丁目  
永寿堂西村屋與八板

後編 表紙

外題 五渡亭国貞画 林屋正藏作

後 丑初春 永寿堂上梓

見返し 敵討鶉権兵衛 後編 柳亭種彦校合 北尾重政

画 林屋正藏作 文政丑の春刊行 西村屋与八板

口絵・十六丁才四卷 此行列の略画は今の北尾重政の

師匠故人北尾政美工夫をもつて画れしは世の人多く知る所

なり。師弟の因にこ、に出す。鎌倉の執権大江の広元卿の

行列を略画にして正面より見たる図 此図ばかり林屋正

藏模写

十六丁ウ、十七丁オ ある年の五月中頃のことなるが、

大江広元公、鎌倉八幡宮へ御参詣ありて帰り申しの鳥居前、彼の小鳥屋利左衛門が前を御通りの節、店先に置きける唯一羽の鶉一声鳴きけるを、広元公御乗物の内にて御聞きあり、御近習の者を召され、「只今鳴きし鶉を求めさすべし」との御意なれば、近習は御買物役人を招き、右の段を申し付けて、御乗り物に従ひ過ぎ行きける。これによつて御買物役人は鳥屋方へ至りて、「この鶉、主君広元公御望みにつき求むるなり。代物何程なるや」と尋ねければ、利左衛門答へて、「金貳百兩にて差し上げ申すべし」と言ひければ、かの役人びつくりして、「それは存じの外の高直なる物かな。いかに殿の御望みなればとて、貳百兩といふ大金にて調べ候事、我が一存にも適ひ難し。せめて百兩ならば求め帰るべし」と申しければ、利左衛門、「貳百兩の内が壹分欠けても売り申さず」とにべも無き返答に、買物役人途方に暮れ、「しからば、某了見には及ばず。御近習まで一応伺ひ又々来るべし」と言葉を残し立ち返りぬ。跡にて女房は利左衛門に向かひ

つぎへ

十七丁ウ、十八丁オ

つづき

言ひけるは、「あの鶉は僅

か式両にて調へられし鳥なるに運の開く時来たり、良き折  
りから鳴きしを忝くも広元公の御耳に留まり、金百両にな  
ることは又とあるべき事にあらず。今日実にくせまりし  
時は鳥目百文にも売り払ひ給ふべきに、余りに強欲のなさ  
れ方、たとへ我が身は尚このままに飢え凍え死するとも、  
さらく厭ふ氣は無けれども、御身肌寒くして折りく他の  
他出を見る度々、我が心の苦しき、口惜しさは如何ばかり  
ならん。百両といふ大金が手に入らば身も自由になり、そ  
れを元手にし給ひなば、御運の開くは定のもの、その金の  
蔓を取り逃がし給ふ恨めしさよ」と身を悶へ、泣き叫びけ  
るこそ、理せめて哀れなり。利左衛門、につこと笑ひ「ま  
ん直しに機嫌を直して、大儀ながら内田屋へいて生酒きさけ五合  
調へ来れよ、追つ付け大江殿より二百両の金子持参して求  
め給ふは必定なれば、祝ふて御神酒をあげ夫婦楽しみ待つ  
べし」と言ひけるにぞ、女房は涙押し拭ひ、夫の心に逆ら  
はず、内田を指して酒調へ、程無く我が家へ帰り見れば、  
利左衛門は火鉢にて小鳥を焼きて居けるが、表を見ればか  
の百両に値の付きし鶉は無くて空籠となりければ、びつく  
りしながら、「是は」と女房狂氣のごとく驚き騒ぎ、「わ  
つ」と叫び伏しにける。その時、利左衛門は少しも騒か

ず、彼の鶉をよくくあぶりつぎへ  
役人「何、二百両、あの、これがと、そふびつくりするこ  
ともねへ。よりかね公は三千両で鷹たかを買はつかつしやる。安い  
方では二十四文でも鷹が買はれる。」

十八丁ウ、十九丁オ

つづき

中より二つに切りて女房

を起こし、「その方女の心に嘆くは尤も至極なり。然り乍  
ら、我その方を迎へしより一日片時安堵もさせず、長の年  
月幾瀬の憂き艱難を見るに忍びずといへども是非も無く、  
無念の月日を送りしに、今月今日の只今、鬱散の時来り  
て、我が喜びこの上なし。大江殿は百両にて調へ、鳴かし  
て幾年も楽しみとし給ふべし。それに勝りて、我は百両の  
鶉を暫時、栄耀の肴として楽しむことなれば百五十万石の  
大江殿もさぞ羨ましく思し召すらん。世には百一ト口と大  
層に言ひ伝へしが、この鶉は五十両一ト口なり。機嫌直し  
てこれを肴として、いざ一献酌むべし」と言ひければ、女  
房も泣く目を払ひ、「夫の心に従ふは女の習ひと、かねて  
は覚悟してありながら貧苦に心迷ひ、暫しも御心を苦しめ  
しは自らが誤りなり。和漢古今に未だ例しなきこの肴、五  
十兩一ト口の焼き鳥は我々夫婦兩人なるべし。いかにも思

し召しに任せ盃を頂き、古今例しなき夫の賜物、例へ御簾中奥方も及びなきこの肴」と夫婦快げに楽しみける。かかる処へ大江殿の買物役人、金子二百両持参して、「先程の鶉を差し上ぐべし」と申しければ、利左衛門打ち笑ひ、「その鶉は先刻二百両と申し上げしに百両に御値切りなされ候につき、我が為ならぬこの鶉と存じ、毛を引き焼き鳥といたし只今夫婦楽しみ居ることなれば、又他々にて御求めなさるべし」と空嘯きて申しければ、かの役人大きに驚き、「すは一大事とぞ出で来り、かくの如き様子を申し上げなば切腹は未だしも、如何様の罪に行はれんも量り難し。世には凄まじき亭主もあるものかな。見る影も無き風情にて、目の前百両の大金となるべき鶉、又暫く見合せなば二百両となるべし、それを焼き鳥として快げに楽しみ笑みを含める夫婦が顔色、これは人間にてはあるまじ」と、且つ驚き又後悔すれども今はその甲斐あらざれば、「とかく一ト度立ち帰り、この様子を申し上げ、打ち首とも切腹とも何分仰せに任さん」と杲然として立ち帰り、かくの次第と御近習まで具さに申し達しければ近習も驚き、有りのままを言上に及びしに、広元公委細を聞こし召され、にっこ笑はせ〇給ひしばかりにて、何の御沙汰も無かりける

が、御側に在りし家老郡藏人と申す人、始終の様子を聞き居られしが、程なく我が家へ帰り、すぐに使ひを以つて鳥屋利左衛門を招き申されしに、利左衛門は臆する色なく破れ単物に片々ちんばの草履を履き、使ひと共に郡藏人の宅へいたりける。

つぎへつづく

十九丁ウ、二十丁オ 　つづき 　暫くあつて藏人たち出で対面ありしに、面体骨柄を見しに、男大きにして眼中鋭く、並々ならぬ人相これ只者にあらず。諸侯第一の大江広元公へ鼻を明かせし痴おこの者、かかる時世を恨みとする器量自然と具はりし者也と心に賞美し、一通りの挨拶終はりしところに、小姓盃を持ち出で、肴数を尽くしてもてなす。酒も半ば過ぎて後、四方山の話の弾みを見ては武芸の事を申し出だされけるに、急度した応対はせざれども、好きの道とて話の弾みくを答へけるに少しの誤りも無く、破れし物を着ながらかく大家の屋敷へ入り来りても怖めず臆する気色も無く、少しも動ぜぬ有様を藏人篤と見澄まして、我が推量に相違なしと思はれ、酒も重なり、又再会を約して帰されければ、利左衛門はほろ酔ひ機嫌に笑みを含み我が家へ帰れば、女房は疾しや遅しと門へ立ち出で待ち明

かし、始終の様子を聞きて後、初めて心落ち着きけり。その後、大江の家老職郡藏人は畠山の御屋敷へ参られければ、重忠公御対面あつて色々御物語の折りを伺ひ、藏人は鳥屋利左衛門が始めよりの次第、その後召し寄せて試し見るに、人相骨柄世の常の者ならず、武芸の心掛けあることを詳しく申し上げ、「まさかの御用にも立つべき者なれば、召し出だされ御気色にも叶ひなば御召し抱へあつて然るべく」と薦め奉りければ、重忠公にも先立つての鶉の噂聞き及ばせられ、御懇望あつて御館へ召し寄せられ、家中の面々と剣術の試合を仰せ付けられければ、異議なく

つぎへつづく

二十丁ウ、二十一丁オ

つづき

御受け申上て年頃の手

練を現し秘術を尽くして手合わせの一幕に重忠公御感あつて二百石にて召し抱へられ、その後いよく思し召しに叶ひ、百石の御加恩あつて今三百石の大神となり、昔の貧苦は折り／＼の懺悔話、一家中の人々へも懇懃に対応なし、飯にも無礼の言葉など無き故、皆々も尊敬し、弟子数多付きにけり。元鶉より出世の始めとなりければ、今改名して鶉権兵衛と申しける。これ即ちお松が兄一龍齋が総領の権

之介なり。先立つて下総より出府せしお松親子、主従、兄の権兵衛に匿われてより、光陰は矢の如く、光吉は早九才とぞなりにける。権兵衛も何卒敵を討たせんと、毎夜人鎮まりて後、奥深き所へ連れ行き、お松・光吉へ剣術の指南せしが、知る人さらに無かりけり。そのうへ光吉、身の軽きこと飛鳥のことく、上へ跳ぶこと六尺余りは常のことなり。光吉ある時母に向かひて、「他所の子は父上あれども我にはいかで父上なし、いかゞし給ふや」と尋ねければ、母は涙にくれながら、「さればとよ、その方生まれ程なく、人知れず闇討ちになり給ひし也。千葉の御家は御暇を願ひ、今かかる身の上となりける」と、伏し沈みて語りければ、幼き心に無念とや思ひけん。齒齧みをなして怒れる有様、さしもの母も身の毛もよだつばかりなり。蛇は一寸にしてその氣を得ると、かりそめの遊びにも剣術の場へ出て目を離さず是を見覚え、丸二年ばかり日夜稽古怠らねば、今はその技に達しける。

五へつづく

四より

ここ

に光介が下部勘藏は主人闇討ちになりし後、お松はいかなる所存やありけん、勘藏に暇を出しければ、程経て親子の心底いかかと畠山の館へ来り、鶉権兵衛方へ案内し、お松親子が顔を見るより唯口ごもり鼻詰まらせ、声も得上げず



泣きゐたる。漸う涙押し拭ひ「月日の経つこと夢の間と、早亡主はうしゅの七回忌に御当たりなさるれば、定めて追善の御供養の御心掛け、尊靈に御手向けの供物等御用意方々御油断はあるまじ」と、それとは無しに敵討ちの有無を探りければ、お松は大きに面色を損じ、「長々の浪人、殊に一子を預かり難儀に及び主従三人、兄上の御世話となりて扶持せられあることは申さずとも、その方も知る所なり。

然るに、追善供養、その上供物の用意するかと、今此困窮を知つて自らを欺くか、先年より我が心に叶わぬ故、暇を遣はし、せめての心行かしと思ふ故、折り／＼の対面を致せしに、不甲斐無き職人の娘と侮り当て付けし一言奇怪なり。今より後は出入も固く無用、対面も是限り」と腹立涙に咽びつつ申しければ、勘蔵は何と答へんやうも無く、手持ち無沙汰に見えけるが心の内に思案して、「よし／＼」と心に領き只ひれ伏してゐたりける。始終聞きゐる権兵衛も妹に向かひ、「その方の腹立ちは尤もなれども、彼も又古主と思へばこそ次へ

二十一丁ウ、二十二丁オ つづき かくは申せしならん。機嫌を直して折り／＼は相変らずこの方へも立入らせ

対面も致し遣はすこそ、亡き人への義理も立ち、亡霊も満足ならん。文治も共々挨拶せよ」とありければ、「何様仰せの如く左様ありては嘆かはしく、私とても甚だ気の毒、御機嫌直され只今までの通り折り／＼の御見舞ひ御対面もあるやうに願ひ奉る」と言葉を添へければ、「その義は追つての沙汰にせん」と振り切り奥へ入りければ、勘蔵は涙ながら「由無きことを申し上げ、御耳に障りしはこの上も無き私が不調法、何分御機嫌直り候やう、よろしく頼み奉る」と権兵衛に向かひて申しければ、「成程為悪しくは計らはじ」と文治に向かひ、「その方が部屋へ伴ひ、酒にても振る舞ひ帰すべし」とありければ、文治は、「畏まり候」と我が部屋へ伴ひて、やや暫く持て成してこそ帰しける。

忠臣の勘蔵を罵り不忠の文治を寵愛す、後家のお松が心の内如何にとなれば、次に説くを見給へ。その後程経て、勘蔵は文治が部屋まで来り対面し、「古朋輩の誼み、捨ても置かれずお世話になり忝し。少々ながら寸志のお礼」と金一ト包み取り出だして文次が前に差し置けば、「是は御丁寧なること、辞退申すも如何」と取り納め、暫く物語りして勘蔵は暇乞ひして帰りける。後にて開き見れば、「金三百疋とは忝し」と欲に目の無き文次ゆゑ喜び、勘蔵ほどの

者は無しと、是より使ひに出し折りくは勘藏方へ立寄りて振る舞ひ酒のほろ機嫌に何やら互ひに話し合ひけるが、勘藏も忍びくは文次が部屋まで至り、何かは知らず長物語りして、世に睦まじく話し合ひける。○かくて兄の権兵衛は、ある時下部に言ひ付、部屋に居る文次を呼び寄せ、有無を言はず高小手に戒めて奥庭へ引き据えたり。この時お松は文次に向かひ、「先年夫光介殿を闇討ちにして、その上刀を奪ひ立退きしは何者なるぞ、真つ直ぐに申すべし」と言ひければ文次は驚き、「こは思ひ寄らざる御尋ね、その節申し上げ候通り、主人御失念の事ありてその義を調べしとの仰せに任せ引き返せし、その後にて何者とも知れず闇討ちになせしなり。相手なければ力無く無念ながらすく罷り帰りし事なれば、敵は誰と存すべきようなし」と申しければ、お松は怒りの言葉を励まし、「その節といひ今といひ申すことの前後の転々、己敵と同心して討たせしと思ひしゆゑ、その場にて討つて捨てんと思ひしが、よく思へば大事の敵、汝を殺すは何より易く、実の敵を聞き届け討つて恥辱を雪がんと心を鎮め、是までは堪へくしもこの子の成長を待たんため、忠義ある勘藏は暇を遣はし、その後又々愛想尽かしを申せしを、その方

は誠と思ひ勘藏と馴れ親しみ、証拠となる書き物を渡せしゆゑ、自らが手へ渡したり。今は所詮逃るる道無し。汝白状せずとも敵は誰と知りしかど、謝つて改むるに憚る事なしと、次へ

二十二丁ウ、二十三丁オ

つづき

長の年月、敵と一体

のその方を無念を堪へ騙しすかして扶持せしは、今尋ぬる一条なれば、真つ直ぐに申すべし」との言葉の下より兄権兵衛、「己白状せずとも敵は蓮葉泥左衛門といふことは先立つて吟味しておきたり。白状せねばそのままにおくべきや、骨を拉ぎて白状せん。者ども来たれ」と言葉の下より文次は頭を上げて、「かくの如くの数々の証拠ある上は、尋常に申すべし。いかにも泥左衛門こと、お松様未だ古主へ嫁し給はぬ以前より心を掛け、並びに瀧鍔をもちかねての懇望せし処、両様共に心に任せず、その内にお松様も古主へ嫁し給ひ、かの瀧鍔も婿引手となりけるを泥左衛門憤り、これより光介様をつぎへ

二十三丁ウ、二十四丁オ

つづき

恋の敵鍔の仇と思ひ込み、かねて討ち果たさんと心掛けしが、その折り無くし

て年月を過ごせしに、私事ふとせし事にて近付きになりしより折り／＼行き交ふその中に、恥づかしながら敵泥左衛門が妹のお亀殿へ執心して言ひ出さんと、思ひ内にあれば色外に現はると、それと悟りて泥左衛門只他所ながらお亀殿の事を言ひ出し、末々は下郎めの妻女に呉れんと約束し、その愛する事父母の如く、折り／＼は金子又は着類まで与へしに、元より愚昧の下郎ゆゑ、色に迷ひ欲に耽り、今日は妹を妻にくれるか明日は許して夫婦かと指折り待ちて暮らす中、ある日御主人光介様、瀧鍔の刀を帶して私を召し連れられ、舅殿方へ御出でなされしを、泥左衛門見つけしや主人と舅御と御物語りの中、一龍斎様の表まで来り私を呼び出し、密かに申しけるは、『今宵光介を闇討ちにして我が遺恨を晴らし、かの瀧鍔をも奪ひ取らんと覚悟極めたり。その方得心して知らぬ顔にて討たせくれよかし。その替はりには妹の亀は早速その方へ遣わすべし』との事、色に迷ひ主恩を忘れ泥左衛門が心に任せし天罰にて、お松様の知恵の鎖に繋ぎ留められ年月を送り、今日の只今此仕儀となりしは主人の罰逃るゝ道なし。なるほど主人は泥左衛門が待ち伏せして討ちしに違ひ無く、その上心憎き泥左衛門、妹お亀をおとり囚にして此文次を斯かる大罪人となし

ながら、その身は何時かこの鎌倉へ出奔して今比企の判官頼員の館にて二百石より千五百石まで次へ

**下段** 此図は清和源氏の正統新羅三郎義光公、我が愛妾を兼ねて鹿嶋三郎義連へ送らんと約を成し、その替はり主人義忠を討ち呉よと頼まるゝ、其夜義連主人義忠を害す、されども義光公惜しみて鹿嶋に愛妾を送らずと、『前太平記』に見えたり。此泥左衛門と文次がことに似たるゆゑ、ここにその古を写す。

**二十四丁ウ、二十五丁オ** **つづき** 立身して妹お亀は御部屋様と傳かれ、年々の立身出世、この意趣晴らしと思へども言ひ出すその時は此身からして言ひ訳立たず、無念の月日を送る中かく囚人となる上は、どこまでも下郎が証人、首尾良く敵を討つたる後、大罪人の此文次、逆磔竹鋸せめて此手が自由にならば人間らしく腹切るものを、縄目の恥の恥づかしや」と前非を悔ひての物語り、この上は敵を討つ一ト道と文次はそのまま禁獄の手に渡され、牢舎にぞ仰せ付られける。去るほどに比企の頼員は泥左衛門が勧めにて日夜の遊興増長し、賢臣は遠ざけられ佞人は益々進み、家の政道は家老坂部長左衛門と蓮葉泥左衛門が取り計

らひにて、町人百姓も安堵の思ひ無くつぎへ

二十五丁ウ、二十六丁オ

つづき

ここに寄り合ひ彼処

に集まり、末々の成り行きを如何と嘆くばかりなり。上には日々の遊興数々の中にも館の内庭の平地に六十間四面の池を掘り、深さ一丈五六尺にして堀水川水を樋ひどひにて呼び池八分に水を湛へ、家中の小者中間は言ふに及ばず足輕に至るまで、水心有るも無きもこの池へ入て泳がせ水入を致させ、早く浮き上がる者を大きに怒り罵り、泥左衛門立出手頃の棒を持つて甚く是を打つほどに、誤つて二三人も打ち殺されし者もありければ、皆々これを怖れて苦しきながらも水底に堪へ居れば、水氣に中りて患ひ死する者少なからず。別してこの遊びは殿は勿論、愛妾のお亀も喜び夏の初めより秋の末まで日に二三度つづつ

六巻へ

五よりつづく

身となりて天を仰ぎ、只悲しむばかり也。ここに家老板部長左衛門は始めは忠臣にて家の柱とも見えしが、何時しか泥左衛門と馴れ合ひ、殿の遊興より我が慰みと心得けるが、今日召し連れし兩人の奴に指図して「兩人共水中へ入て興を添ゆべし」とありければ、一人の奴はその色飽くまで黒き糸鬘頭、「畏まり奉る」とて紺の台無し脱ぐより早く水中へ飛び込みしに、一人の奴は是を見て興醒め顔に立ちただかつて水中を眺め居ければ、長左衛門は奴に向かひ、「己何とて主命を用ひず水中へ入らぬぞ、あまつさへ立はだかつて慮外致す」ときめつくれば、奴答へて、「池の団亀なら潜るべいが、おらは得潜らない」と空嘯きて申しければ、長左衛門大きに怒り、「泥左衛門殿、御苦勞ながら此奴を打ちのめして給はるべし。拙者家来とて容赦あつては蟲眞の沙汰、政道も立たず、その後は御前の恐れもあれば屋敷へ召し連れ帰り、手打ちに

次へ

二十六丁ウ、二十七丁オ

つづき

致すべしとの言葉の

下より泥左衛門、元より好む処なれば「心得たり」と言ふままに棒おつ取つて打つて掛かるを丁ど受け止め、「どつこいさせぬ」と言ふその間に、泥左衛門が鏢を見れば一龍

齋が打ちし瀧鏝に相違なければ、「さては敵に相違なし」と思ふ中、泥左衛門は声を掛け棒を取り直して真つ向微塵と打て掛かるを透かさず付込み、泥左衛門を池へざんぶと打ち込み、その身も続ひて飛び入、水波打つてもんどり返す。殿を始め近習の面々大いに騒ぎ、騒動しけるを坂部長左衛門は押し隔て、「君子は危ふきに近寄らず、君は申すに及ばず近習の面々騒ぎ給ふな。何程の事あらん」と制しければ、元より水中の事、如何ともすべき様なく只うろたゆるばかり、各々興を醒まし池の面を空しく眺め居る中に先に飛び入りし一人の奴も浮かみ出、泥左衛門が足首取つて水の深みへ引き摺り込み、兩人の奴と共に泥左衛門が形掘らせし池は広さ六十間四方にして樹木生い茂り道筋つぎへ

二十七丁ウ、二十八丁オ

つづき

あつて十間ばかり到

れば竹垣を結び中程に樽葺きの小門あり、是を入ば又平地にて隅々に御茶屋・待合などありて至極の絶景言ふばかり無し。この垣一ト重を出れば直ぐに比企が谷の松原なり。此処に控へ居るは星月光介が一子光吉当年九才、下には鎖

帷子の着込、上には浅黄縮緬の単物、晒木綿の鉢巻引締め、大小凜々しく構へたり。同人の母今年二十四才、着物は一様にして一ト腰を帯し、薙刀を搔い込み光吉が右の方に控へければ、検使は頼員の家中、その他物頭・大目付兩人各々床几に掛かり、足軽五十人四方を固め、さて向ふの方、高さ二丈ばかりの築山ありけるが足軽大勢立かかり、山の側へ寄りて土を搔き除くれば苔生したる土戸なり。その跡を見れば方一間ばかりの洞穴にして奥は幾丈ありとも知れず、この処より兩人の奴、泥左衛門を中に挟んで連れ出る。三人ながら水浸しとなりける中にも、泥左衛門やや暫くして目を押し拭ひ辺りを見れば、左りの方に十才ばかりの男子大小立派に凜々しく出立ち、右りの方には元より見覚へある一龍齋が娘光介が妻なれば「さては敵を討たんだめなり」と察して初めて驚くばかり也。此時検使の役人、泥左衛門に向かひ、「その方先年手に掛け闘討にせし星月光介の一子光吉並びに後家お松、親夫の敵討ちの願ひありしによつて今斯くの如し着類を改め、尋常の勝負あるべし」と単物・帯・鉢巻までも改めさせける。その間に兩人の奴共衣類を改め大小差して申しけるは、「某は光吉が叔父お松が兄にて秩父の重忠公の御内に鶉権兵衛と言ふ者な

り。幼少の甥、若年の女ゆゑ次へ

権兵衛

泥左衛門

勘藏

光吉九才

お松廿四才

二十八丁ウ、二十九丁オ

つづき

主人へ願ひ、後見と

して来り、さて又一人の奴は光吉が譜代の家来勘藏なり」と言ふに、泥左衛門呆れ果て一言の返答も無く、只呆然たり。検使の役人「早疾くく勝負」とありければ、東の方より光吉立出ければ、西の方より泥左衛門立向かふ。光吉声掛け、「いかに蓮葉泥左衛門、先年その方が手に掛け鬨討ちにせし星月光介が一子同名光吉、父の敵覚悟せよ」と斬つて掛かれば泥左衛門、「小賢しき倅め、大人気無けれど真つ二つ」と丁と受けて受け流し、胴斬りになさんと腕に殴るをひらりと飛び越え後ろへ回り、一刀斬り付しが小腕の浅手に少しも怯まず、振り返りて真つ向微塵と打つ刀を横に掃ふて付け込み、又一刀斬り付けしが、これにも弱らず泥左衛門秘術を尽くせど、光吉が覚え込んだる妙術に身の軽きは陽炎稲妻、前にあるかと思へば後ろへ回り右を打てば左りへ飛び、手に回らずといへども流石は子ども、息切れのせし体を見て後家お松立ち代り「夫の敵思ひ知らさん、いざ」と声掛け、泥左衛門が言はんと息遣ひ

の虚をすかさず、左りの肩先強かに掬はれながら飛び込んで蹴倒さんとせし処を、光吉押し隔て二打ち三打ち闘ひしが、光吉も掠り傷を受け漂ふ処を、得たりと付け込む泥左衛門、光吉は後退りして権兵衛が側へ寄りしを尚も付け入る泥左衛門、飛んで掛かるを権兵衛が足を出せば、これに躓きうつ伏しに倒れけるを、光吉泥左衛門が背中へ飛び乗り身柱元を辛辣しに刺し通せば、何かは以つて堪るべき、うんと一ト声儂くもそのまま息は絶えにける。引き返して止めの刀、皆々どつと声を上げ暫しは鳴りも止まざりけり。この由、具さに殿へ申し上げければ頼員大きに驚き怒らせ給ひて「予が寵臣の泥左衛門を討ち取りしこと不届きなり。彼等残らず討つて捨てん」と御刀に手を掛けられつ、立給ふを家老坂部長左衛門、御袂を控へて申し上げけるは「御驚き御立腹は至極御尤もに存じ奉り候が、彼等が仇討ばかりにあらず。泥左衛門は大悪人、その悪人と知つて年頃某が合体して下々の嘆きも思はず、悪と知つて悪に組みせしは、予ての計略」と泥左衛門が積悪の始め終りを具さに申し上げ、「重忠の計らひにて將軍家まで次へ

二十九丁ウ、三十丁オ

つづき

達せられ、「千葉の家よ

り泥左衛門を貰ひ受けん』とありし時、御寵臣の泥左衛門おめ／＼御差し出しあつては不仁と言ひ卑怯と言ひ、御一分も廢り天下の諸侯指差し唾吐き罵り笑ひ給はんこと目の前にあり。又、御渡し無き時は大騒動の元と存じ、光吉が叔父重忠公の近臣鶉権兵衛並びに下部勘藏を某が家来となし、最前池の傍にての過言慮外に某怒つて、泥左衛門に棒にて打てよと言ひしも、思ひ掛けなき処を池へ打ち込まさん手立て、その前に飛び込みし勘藏水底に待ち受けて水心無き泥左衛門なれば思ふままに水を喰らはせ、抜け穴より御屋敷外へ連れ行き、着類を改めさせ正氣となして敵討ちの式法を嚴重に調へ、殿より下し給ふ体にして檢使・物頭・横目・足輕五十人に固めさせ、尋常に勝負致させしに、幼少の光吉・若年のお松兩人共に武術に達し、さしも強敵の蓮葉を難無く討つて本意を達したり。この上は広大の御仁政を以て彼等が罪を御許しあり、御愛妾お亀殿も御暇給はり候やう偏に願ひ奉る。又、この長左衛門が君を謀りし罪科とあつて御手打ちになるとも思し召しに任せられ、とかく御身持ち御不行跡を改められ、御仁政を執り行ひ御家繁栄のほどを願ひ奉る」と、霰のやうなる涙を流し少しも恐るる気色も無く退つて諫言申せしは前代未聞の智仁勇、

げに類無き忠臣にて玉の礎とも言ひつべし。元より明智の頼員なれば、何と返答無けれども前非を悔ひし御顔色、につこと笑ふて御座を立ち、奥の御殿へ入り給へば各々退出致しける。是より光吉主従三人は重忠公へ御礼申し上げければ御喜び斜めならず。鶉権兵衛は重忠公より百石の御加増あつて一龍齋が末子音一郎を養子として家富み栄へけり。又、光吉は下総千葉へ立ち帰り、敵討ちの始末一々に申し上げ、千葉家よりも重忠公並びに比企の家老へも御礼あつて光吉は先知三百石に又御加恩下され都合六百石にて父星月光介が名跡を継ぎ、尤も役儀は十五才の後申し付くべしとの御事なり。勘藏は千葉家の直參と御取り立てあり。後家お松は髪を下ろし、貞松尼と法号ほうしうとして父一龍齋と共につぎへ

三十丁ウ

つづき

亡き人々の跡弔ふて世を清く行ひ澄

ましたり。扱又ここに泥左衛門に同心せし下部文次は大罪にも行なはるべき処を重忠公の御仁政を以つて一命を助けられ、両方の耳を削ぎて追放仰せ付けられける。又泥左衛門が妹お亀は比企の家を追ひ出され、鎌倉松が岡にて尼となり兄泥左衛門が跡弔ひける。兼ねて判官頼員はお亀を同

道にて江戸表へ下ると聞こえしも、今日明日といふ中、此騒動ゆゑ、その事も止みぬ。世の盛衰は愚かなる凡人の知る処にあらず。

その頃の流行り歌に「池の団亀なら潜るべいと 下略

これは彼の池の傍にて権兵衛が奴に身をやつせし時言ひし言葉なり。全て下総訛と知るべし。いけすか女郎のおたびざし あすは関東さへまいるべい 下略 これは蓮葉泥左衛門が妹なれば、かく言ひかけたり。蓮葉をいけすかとはかの水潜りの池を好くといふ心にてそのときの子らが片言なり。めでたし

江戸 林屋正蔵作 北尾重政画

江戸本問屋 馬喰町二丁目角 永寿堂 西村屋与八

復うつらごんべまものがたり 鶺鴒つゞきものがたり 権兵衛物語 鶺鴒つゞきものがたり 権兵衛物語

合卷 前後編 全六冊・三十丁

林屋正蔵作。柳亭種彦校合。北尾重政画。

表紙絵は五渡亭（歌川）国貞。

文政十二年（一八二九）西村屋与八版。

梗概

下総の国に一龍斎という名鍔鍛冶がいた。長男の権之介は名主の娘八重と駆け落ちして行方知れず。二男は父の跡を継ぎ、父が打った稀代の鍔「瀧鍔」に優るとも劣らない鍔を打ち出した。娘のお松は、名刀を求めてやって来た千葉家の家臣星月光介と結婚。二男の打ったその名刀を貰い受け、息子光吉も生まれて幸せに暮らしていた。ところが、ここに蓮葉泥左衛門という浪人者が出現する。お松と名刀の両方を手に入れんと、光介の下部文治を抱き込み、光介を闇討ちにして名刀を手に入れ鎌倉へ。その後、妹お亀を餌に比企頼員家の千二百石の大身となり、傍若無人、我が世の春を謳歌していた。一方残されたお松は、幼い光吉の成長を待つと敵討ちの思いを心に秘め、下部の文治と勘蔵を連れて、今や畠山家三百石の大身となった鎌倉の兄権之介の元へ行く。兄は欠け落ち後、飼鳥屋を営んでいたが、ある時、大江広元公に求められた鶺鴒、家来が値切ったのが気に入らぬと、焼いて食べてしまった。大名の鼻を明かしたその器量が気に入られ、畠山重忠公に推挙されたのである。それ以来、彼は「鶺鴒



権兵衛」と名乗るようになった。お松親子は、兄から密かに武術の手ほどきを受け、敵討ちの時節を待つ。光吉が九才になった年、文治に闇討ちの顛末を白状させ、泥左衛門が遊興のために掘らせた池を舞台に、兄 鶉権兵衛と下部勘藏の大活躍。泥左衛門を敵討ちの場に引き出し、お松親子に見事敵討ちを果たさせ、めでたし、めでたしの物語。

合巻「敵討ち物」の類型的な一作である。

作者は江戸に生まれ、二十六歳で落語家初代三笑亭可楽に入門、後に「怪談咄の祖」といわれた初代林屋正藏（天明元年・一七八二〜天保十三年・一八四二）である。可楽の門下には、他に「芝居咄の祖」といわれた三遊亭円生、「人情咄の祖」といわれた朝寝坊夢楽等がいた。「落し咄正藏」の活躍ぶりは、式亭三馬『浮世床』にも書かれているが、次第に「化物咄の正藏」として名をあげ、文化十四年（一八一七）、西両国に自身の定席「林屋の席」を経営するようになってからは、「大仕掛け、鳴物入り」の怪談に磨きをかけ、江戸に来る多くの人々の人気を集めた。正藏の戯作活動も、これ以後の文政七年（一八二四）滑稽本『先開而三升世界』に始まり、咄本『新作笑話たいこの林』や、合

巻『尾尾屋於蝶 三世談』等、咄本、合巻、滑稽本多数を残した。これらはみやげ物として寄席で売られた。しかし、天保の改革（一八四一〜）によって、「鳴物入り芝居掛りの咄」が禁じられるに至り、翌年六月、失意のうちに亡くなった。

校合と序文の柳亭種彦は、式亭三馬と共に、江戸落語の中興の祖といわれる烏亭焉馬（可楽の師）の「咄の会」に参加、落語にはかなりの関心を持っていた。正藏の作品には本書の外、合巻『怪談春雛鳥』天保八年（一八三七）にも序文を書いている。（本作と同じ年、種彦の代表作となる『修紫田舎源氏』の出版が始まっている。）

なお、「鶉権兵衛」にはモデルがいたようである。享保九年（一七二四）松崎観瀾の随筆『窓のすさみ』にその逸話が書かれている。式亭三馬も、黄表紙の色合いの残る合巻『鶉権兵衛俠膽話』文化七年（一八一〇）を書いている。権兵衛の反骨魂は江戸の人々のみならず、明治に入っても好まれたのであろう。桃川燕林講演・今村次郎速記の講談百冊二の巻『熊野霊現鶉権兵衛』明治三十年三月十六日文事堂が出版されている。

なおこの作品についてのより詳細な解題は、別稿を予定している。

翻刻を許可して下さった天理大学附属天理図書館の御好意に感謝いたします。

天理大学附属天理図書館本

翻刻 第一〇五八号

複製 第二四八号

(本学平成十九年度日本語日本文学科卒業生)